

2025年度「地域活性化プロジェクト支援」の取り組み概要 映像制作体験を通じた人材育成と交流機会の創出 ～認定NPO法人山形国際ドキュメンタリー映画祭による映像教育活動をサポート～

1. はじめに

当センターは、東北圏（東北6県および新潟県）の機関・団体等が主体となるプロジェクトを支援・協力する「地域活性化プロジェクト支援」に取り組んでいる。これは、当センターがこれまで蓄積してきた調査・研究事業などの成果を活用し、東北圏の地方自治体や非営利団体（観光協会・商工団体・NPO・産業関連団体等）が主体となる地域・産業の活性化に関するプロジェクトの具体化を支援することを狙いとしている。

2. 2025年度の事業方針

2025年度は「映像制作体験を通じた人材育成と交流機会の創出」をテーマに、認定NPO法人山形国際ドキュメンタリー映画祭（以下、同法人）（山形県山形市）による「映像教育活動」の取り組みを支援した。

同法人は2007年の設立以来、映画のまちとして知られる山形市内において、2年に1度開催される山形国際ドキュメンタリー映画祭^(注1)の開催のほか、児童・学生を対象とした映像制作ワークショップの開催、映画祭への応募作品を市民や愛好家が気軽に見られるよう収集・保存するライブラリー事業など、映画文化の振興に関する活動に取り組んでいる。

当センターでは、2025年7月から10月にかけて、同法人が実施した児童・生徒を対象とした映像教育活動に対し映像制作の専門家派遣等

を行い、地域交流の促進をはじめ、子どもたちのICTリテラシー向上や創造力、自己表現力、コミュニケーション能力を育む活動を支援した。

本稿では、同法人が実施した「映像教育活動」の様子を紹介する。

注1) 1989年10月、山形市施行100周年記念事業として第1回山形国際ドキュメンタリー映画祭が開催された。



映像制作の様子（写真左：同法人 岡部愛氏）

3. 蔵王温泉を舞台とした映像制作合宿の概要

3-1 温泉街の街歩きによるアニメーションの素材収集

2025年7月20日・21日、山形市蔵王温泉のホテルを会場に、小学3年生から中学2年生までの児童・生徒19名が参加する映像制作合宿を開催した。本合宿には、主催者である同法人の岡部愛氏、共催者の探究教室ESTEM田口雄太氏、阿部宜行氏、同法人およびESTEMスタッフの天本里美子氏が参加し、映像クリエイター

の稻吉翔平氏、株式会社 KUNK 代表の濱田直樹氏が講師を務めた。

合宿で制作するアニメーションのテーマは「蔵王温泉の魅力を発信！」。子どもたちはトップモーション・アニメーション^(注2)の手法を用い、地域の魅力を伝えるオリジナル映像制作に挑戦した。

注2)止まっているもの・人を少しずつ動かしながら撮影し、続けて再生することでアニメーションを作る手法。コマ撮りアニメとも呼ばれる。



オリエンテーションの様子
(写真中央奥: 探究教室 ESTEM 田口氏)

合宿初日、オリエンテーションとして田口氏よりスケジュールや注意事項等を説明した後、参加者一人ずつ自己紹介を行った。その後、講師の稻吉氏より映像制作に関して「映像を作るときに大事にしていることは、見た人にどう思ってもらいたいかを考えること。一つの作品を作るためにはさまざまな役割があるので、みんなで頑張りましょう」と話し、テーマである「蔵王温泉の魅力を発信！」について「魅力とは人の心を惹きつける、夢中にさせる力のこと。実際に蔵王温泉街を歩いて、お店の人に話を聞きながら素敵だと感じるところを撮影しましょう」と呼びかけた。

オリエンテーション後、子どもたちは蔵王温泉街にある「湯の花茶屋 新左衛門の湯」「雪ぐら」「ロッジまつぱっくり」「Zao Onsen 湯旅屋 高湯堂」など温泉街の店舗を訪問。店主との

会話や風景観察、撮影を通して店舗や商品、温泉街の街並み、須川温泉神社の御朱印など、アニメーションに使用する素材を撮影。ロープウェイや温泉街を流れる川、共同浴場など、子どもたちが魅力を感じた蔵王温泉の風景を積極的に撮影する姿が見られた。



お土産店での撮影の様子

3-2 素材制作とトップモーション・アニメーションの企画検討

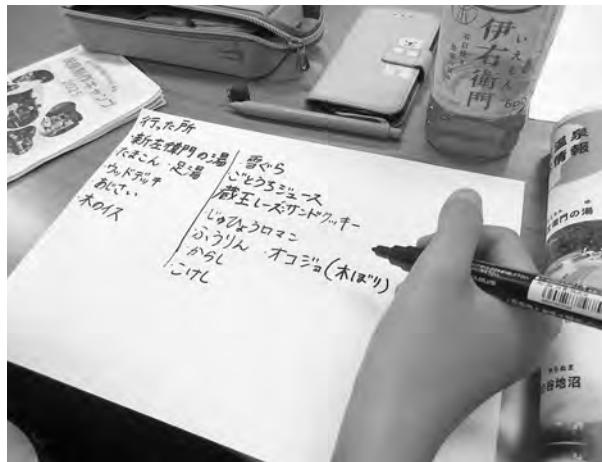
ホテルへ戻ると、撮影した写真を印刷し、映像制作の素材として使えるように切り抜く作業を始める。今回の映像制作ではトップモーション・アニメーション用のアプリを使い、切り抜いた写真にマグネットを付けてホワイトボード上で動かしながら、1コマずつ iPad で撮影した。



印刷した写真を切り抜く様子

ここからは2班に分かれて作業を進める。A班は玉こんにゃくなどを販売していた「雪ぐら」「酢川温泉神社」、B班は足湯を楽しんだ「新左衛門の湯」「高湯堂」を題材とした映像を制作することとし、それぞれアニメーションの構成について意見交換を行った。

A班では「ロールプレイングのように、玉こんにゃくを食べるとパワーアップするはどうかな」「御朱印をご褒美アイテムにしたら面白そう」とアイデアが出される。B班では撮影で印象に残ったこと、どのような映像をつくりたいかを発表し合い「宇宙人が登場するのがいいと思う」「進行役がいて、味方が増えていくストーリーがいい」など、様々な意見が出された。稻吉氏からは「今回のテーマである『蔵王温泉の魅力』をどのように伝えるかを考えよう。映像でどのような動きを取り入れるのかもイメージしよう」と、映像制作のポイントが伝えられた。



アニメーションの構成を考える

子どもたちは写真を切る人、絵を書く人、マグネットを貼る人など自然と役割を見つけて、自主的に考えて行動する姿が見られた。

3-3 ストップモーション・アニメーション撮影

合宿2日目、本格的にストップモーション・アニメーションの撮影に取り組む。

撮影は、iPadを三脚で固定し、ホワイトボー

ドにマグネットで貼った素材を少しづつ動かしながら撮影を進める。「合宿が終わっても家族のスマートフォンや学校で支給されるタブレットで撮影できるよう、専門的な機材は使わないようにしています」と同法人の岡部氏は話す。

A班、B班ともに、ホワイトボードの素材を動かす人、撮影する人、足りない素材を制作する人など、自然と役割を分担し作業を進める。

1日目は緊張した面持ちだった子どもたちも2日目には打ち解け、より活発に意見を交わす様子が見られる。「学校行事等が新型コロナウイルスの影響を受けた世代で、かつ文科系の活動の合宿はあまりないため、みんな喜んでくれ



アニメーション撮影の様子

たようです」と探究教室ESTEMの阿部氏は話す。

撮影を進めながら「ここで玉こんにゃくを食べたら面白そう」「バスから降りてくるのはどうかな」「宇宙人を登場させよう」など、次々とアイデアが生み出される。時折、講師の稻吉氏や濱田氏が「ここの展開が早いかもしれない」「きっかけがほしいから、文字を挿入するといい」など、プロの目線からアドバイスする。講師の助言を受けながら、場面のつながりやテロップの出るタイミングを工夫するなど、試行錯誤を繰り返しながら、映像表現への理解を深めた。

3-4 ストップモーション・アニメーション作品の試写会

アニメーション撮影後、保護者も参加する試写会を開催。参加者は真剣なまなざしで映像を視聴し、試写会が終わるとホールは大きな拍手に包まれた。

試写会終了後、A班・B班ともに作品の良かった点や改善したい点を発表し、保護者からも細かな工夫への驚きやストーリー性への評価の声が寄せられた。子どもたちからは「一コマずつ撮影するのは大変だったけれど、だからこそこうやってやりがいのある映像を作れたんだなって思った」「初日に街を探索するのが楽しかった」「みんなで協力して何かを作るのが楽しかった」などの感想があった。



合宿での試写会の様子

岡部氏からは「子どもたちはとてもクリエイティブな発想やアイデアを持っていて、ツールを渡せば自分たちで作れることが私にとっても刺激になりました。学校の部活動が外部に移行する中、文科系の子どもたちが作品を作る場所がこれから減っていくと考えられるため、このような機会にツールを覚えてもらい、家庭でもぜひ続けていってほしいです」と今後の期待を伝えた。田口氏からも「みんなで協力して、チームとしてまとまっていく姿を見られてうれしく思った。もっとこうすればよかったという意見

が出てくるということは、それだけ映像づくりに真剣に向き合ってくれた証。これから編集作業や上映会に向けた発表練習もあるので、引き続き一緒に頑張ろう」と伝えた。

4. 映像編集作業の概要

映像制作合宿から約3週間後、制作した映像の編集作業が始まった。会場は、山形市立第一小学校の旧校舎を活用し、ギャラリーやショップ、スタジオなどが集まった施設「やまがたクリエイティブシティセンター Q1」。



やまがたクリエイティブシティセンター Q1

冒頭、合宿に同行した同法人の岡部氏、探究教室ESTEMの田口氏とともに、合宿で制作した映像の振り返りを行った。その後、合宿時には気づかなかった改善点を話し合い、テロップの整理、追加撮影、BGMやエンドロールなどを追加する。その様子を見ていた岡部氏からは「テロップが多すぎると分かりにくくなってしまう」「音楽で雰囲気を伝える方法もある」など、プロの目線からアドバイスが伝えられた。その後も毎週末に編集作業を進め、作品は8月中旬に完成した。



探究教室 ESTEM 山形校での編集作業



発表練習の様子

5. 上映会の発表練習

9月に入ると「山形国際ドキュメンタリー映画祭2025」での上映会に向けて、台本制作と発表練習が始まった。子どもたちは、楽しかったことや難しかったことを話し合う。田口氏は「子どもたちにとって経験や思いを言語化するのは難しかったようですが、自分たちなりに考えをまとめながら文章に落とし込んでいきました」と振り返る。

原稿が完成すると、誰がどの部分を読むのか、担当するパートを話し合う。自分が読みたいパートを伝える場面や、まだ担当が決まっていない人に「どこを読みたい?」と希望を聞くなど、互いに意見を尊重し合いながら発表するパートを決定する。子どもたちの中で自分の意見を伝える大切さとともに、周囲の意見も聞こうとする視野の広さが育まれていることが伺える。

発表練習では、映像制作で楽しかったことや苦労したこと、見どころのほか、指導してくれた周囲の人や合宿に参加させてくれた家族への感謝が伝えられた。

発表練習を聞いた田口氏からは「緊張するとき声が小さくなってしまうから、最初から大きな声で発表しよう」「『注目ポイントは~』など、何に関する発表なのかを伝えるようにしよう」「最初と最後の挨拶は、みんなで声を合わせて言おう」などとアドバイスが伝えられた。

この後も上映会直前まで全体での発表練習を行い、上映会当日を迎えることとなった。

6. 上映会の概要

10月13日、会場となる「フォーラム山形」に緊張した面持ちの子どもたちとその家族が集まった。岡部氏と田口氏からは、改めて上映会での発表の流れや注意事項が伝えられた。子どもたちは緊張しながらも発表を成功させようと、自主的に発表練習を始める。その様子を見ていた岡部氏や田口氏は「自然体でいこう」「リラックスして、楽しみながらやりましょう」と声を掛け、子どもたちをサポートした。



上映会直前の発表練習の様子

会場に入ると、映画祭に参加中の映画監督アンマール・アル=ベイク氏が来場。アル=ベイク監督はシリア出身の作家・美術家で、映画祭では「トレパネーション」という作品がインターナショナル・コンペティションに選出された。

アル=ベイク監督は子どもたちに挨拶し「私は君たちから映画を教わりにきました」「10年後、映画監督になりたい人はいますか」と問い合わせると、子どもたちは「YouTuberになりたい！」など将来の夢を伝えた。



アル=ベイク監督による子どもたちへの挨拶

上映開始の時間になると、会場は立ち見客が出るほど多くの人が集まった。岡部氏からは、今回の活動は映像文化普及のための事業の一つであること、子どもたちが「地域の魅力発見」をテーマに映像を制作したことなどが観客に伝えられた。

そして、いよいよ2グループの映画が順番に上映されると、観客は創造力豊かなストーリーに引き込まれ、上映が終わると会場は大きな拍手に包まれた。

上映後、グループごとにスクリーンの前に立ち、映画の見どころや制作した感想を発表。上映会に向けて何度も発表練習をしてきた子どもたちは、リラックスした様子で観客の前に立って発表を始める。

子どもたちは「ストーリーを考えないで作り始めてしまったため、追加の撮影が多くなり苦労しました」「最初はみんながばらばらでチームワークができていなかったけれど、少しずつ自然に役割ができて協力できました」「みんなで作ったからいろいろなアイデアが生まれて面白い作品ができました。これからは場所や表現方法を変えて、他の土地の魅力も発信してみたいです」など、映像制作を通じてそれが感じたことを発表した。そして、撮影に協力した蔵王温泉の地域の方々や講師の稻吉氏、濱田氏、合宿に参加させてくれた両親への感謝の言葉で締めくくられた。



発表の様子

子どもたちの映画を鑑賞し、発表を聞いたアル=ベイク監督からは「このような素晴らしい映像を見せていただいて、とても幸せに感じています。みなさんの発表で特に素晴らしいかったのは、多くの人にお礼の言葉を伝えていたこと

で、それは一番大切なことです」「みんなさんは、映像のストーリーを考えずに作り始めてしまったことを反省していましたが、最初からシナリオをきちんと設定する必要はないと思います。なぜなら、編集作業の中で素晴らしいものを見つけることもあるからです」などと、感想やアドバイスを伝えた。



子どもたちとアル＝ベイク監督の交流の様子

上映会後、アル＝ベイク監督は「分からないことがあったらいつでも連絡してね」と、子どもたちに連絡先やサインを渡す。子どもたちからは「上映会では、自分たちの映画をみんなに見てもらい、監督に『これからも映画を作ってね』と言ってもらえて、とても嬉しかったです」「本物の映画監督になった気分でした。これからも映像を作ってみたいです。とても良い経験になりました」との感想が寄せられた。また、保護者からも「子どもの可能性を発見することができて、すごくありがたいなと思いました」「監督から直接コメントをいただき励みになりました」などの感想が寄せられた。

岡部氏は「子どもたちは上映会に向けて主体的に編集作業や発表練習に取り組む中で、責任感や協働性、発信力が育まれ、合宿からの成果が表れたと感じています。上映会当日は、海外の映画監督による講評や観客との交流もあり、子どもたちが社会に発信する意義を実感する貴

重な機会となりました」と今回の取り組みを振り返る。

また、田口氏も「子どもたちが楽しんでいる様子が見られたので、とてもよかったです」といいます。子どもたちは主体性をもって映像制作に取り組むことができました。映像制作の中でチームワークが生まれ、仲間との交流も広げることができました」と振り返った。

7. 2025年度の支援事業の総括

当センターでは、2025年度の地域活性化プロジェクト支援事業において、映画のまちとして知られる山形市内において長年にわたり映画文化の振興に取り組んでいる「認定NPO法人山形国際ドキュメンタリー映画祭」による映像教育活動を支援した。

映像制作合宿では、子どもたちは地域住民や参加者同士と交流を図るとともに、蔵王温泉街の魅力を再発見することができた。また、相手に自分の意見や考えを伝えることの大切さや難しさを実感するとともに、協力し合いながら最後までやり遂げたことで「単なる映像制作」を超えて、仲間との協働、表現の難しさ、自分のアイデアが形になる喜びが体験できる機会を提供することができた。

上映会では、一般来場者、映画祭関係者、海外から招聘した映画監督など、子どもたちは多くの人と交流を深めることができた。山形市民に親しまれている映画館「フォーラム山形」で上映が行われたことで、多くの地域住民や映画祭参加者が作品を鑑賞し、国内外の人々が交流する機会が生まれ、地域における文化的な賑わいの創出にもつながったものと考える。

更に、今回の支援事業において制作された子どもたちの映画がアジア最大級のドキュメンタリー映画祭である「山形国際ドキュメンタリー映画祭2025」のプログラムとして上映されたことは、映画祭来場者の関心を高める契機と

なった。

また、アル＝ベイク監督と子どもたちが交流する様子が国際的なテレビ番組で紹介されたことにより、今回の映像教育活動における社会的意義や映画祭の魅力が広く伝わり、今後の映画祭の機運醸成につながるものと考える。

8. 今後の展開

東北圏において、地域・産業振興に取り組んでいるものの、何らかの課題によりプロジェクトが円滑に進んでいないケースに対し、当センターが協働し後押ししていくことは、一定の意義があるものと考える。

引き続き2026年度も、東北圏の更なる発展に寄与すべく、当センターの有する知見を基に地域の活性化に取り組むプロジェクトの支援を行っていきたい。

なお、今回の映像教育活動の様子は、当センターホームページにて詳細を紹介している。

▼当センターホームページへ遷移

